タブレット端末を積極活用

教員と生徒双方向で

附属釧路中学校　ＩＣＴ教育

タブレット端末を使って授業に臨む生徒

一斉休校の経験基に

北海道教育大学附属釧路中学校（生徒数289人、早勢裕明校長）は、一斉休校中に実施したオンライン授業での経験を基に、タブレット端末を活用したＩＣＴ（情報通信技術）教育を毎日行っている。オンライン授業自体も月に1回継続し、取り組みの内容は書籍にまとめた。世界中で急速にデジタル化が進む中、未来の教育の在り方を模索している。

同校はタブレット端末を導入しており、現在使えるのは1学年分より少し多い約140台。生徒には以前から入学直後に使い方や注意事項を学ぶ場を設けていた。

オンライン授業は4～5月の休校期間中に行った。国語などの主要5教科が中心で、授業時間は生徒の負担などを考えて1日3時間。新学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」を目指し、教員と生徒双方向のやり取りができる環境を重視。学習支援システム「ロイロノート」やウェブ会議アプリ「Ｚｏｏｍ（ズーム）」などを使用した。

各教員はオンライン授業で「生徒一人一人の理解度がより正確に把握できる」「教師の授業力が一層求められ、教師の授業が選択される時代になる」などと感じたという。

得られた経験を生かすためにも、学校再開後は通常の授業の中でタブレットを積極的に活用することとした。

意見や技術　共有瞬時

現在は主要5教科に保健・体育なども加えた全9教科で使用している。数学の赤本純基教諭は、問題を解いている途中で画面に表示させ、個々の学習到達度を瞬時に確認した上での個別指導を行っている。画面は生徒同士でも共有させ、自分と別の解き方がないかなどを知ってもらう。

赤本教諭は「今まではクラス全員の考えを知ろうとすると時間がかかったが、（タブレットを使用すれば）意見や技術の共有が席に座った状態で瞬時にできる」と利点を強調する。授業では生徒に問題から解答まで自作させるという指導を前から行っていたが、これも全員分をすぐに共有でき、「クラスに33人いれば、33人分の問題集を瞬時に見ることができる。一層学びを深められる」と語る。今後は生徒同士が意見を述べ合う協働的な学習の中でも使うことができるかを探りたいという。

主要5教科以外にも、美術では自身の考えを述べる際の発表用資料をタブレット上で作らせ、作業の簡略化にもつなげている。音楽では札幌の学校の生徒とオンラインでつなぎ、同時に鑑賞して考えを伝え合う試みも行った。3年の菊池貫太さんは「たくさんの資料が手元にある状態で、手軽に持ち運べて、気になった時にいつでも見られる」とメリットを話す。

国内では現在、小中学生に1人1台ずつタブレット端末を支給する「ＧＩＧＡスクール構想」が進行中だが、同校でも来年度の1人1台体制に向けて準備が進む。4月は小中一貫の義務教育学校となるタイミングでもあり、小林一博副校長は「可能性はさらに広がる。成果の発信も行っていきたい」と抱負を述べている。

月に1度のペースで実施しているオンライン授業

タブレットを使って行われるグループ活動